

第2回 江府町小中一貫教育推進検討委員会【議事録】

■期 日：令和元年 6月28日（金）

■時 間：19：30～21：30

■場 所：防災・情報センター 1階自主防災室

<会議出席者>

【委員】手島委員長、谷田副委員長、井上委員、神庭委員、河上委員、梅林徹委員、川上委員、中田委員、山川委員、梅林明委員、瀬尾委員、竹内委員

【事務局】富田教育長、加藤課長、山本課長補佐

【傍聴者】6名

1 開 会

委員長挨拶

こんばんは。おつかれのところご参集いただきありがとうございます。

梅雨に入ったところで、ゲリラ豪雨等がないことを祈るばかり。G20でも最終日に地球の変動について話し合われることが予定されているようだ。このままでは孫の代、ひ孫の代までどうなるんだろうかと、地球全体を考えながらいい方向性が出てくるのではないかと思う。それに関しては国民一人一人が努力をしていかないといけない。ひ孫の代までどうなるかということ意識しながら、できる面はやっていかないといけない。

午前中病院に出て診察を受けて帰る途中運転しながら、今晚のことを思い描きながら帰ってきた。ご存知かと思うが、長岡藩が戊辰戦争で負けて禄高を6割減らされた。節約に節約を重ねたが、藩士が家族を抱えて食べるものもなく困っている状況。それを見かねた隣の藩が米百俵を贈った。藩士は「これで何とか家族を養える」という気持ちでいたが、責任者の小林虎三郎が、「これは藩士の子どものために学校を建てる」と言った。その百俵を売って学校を建てた。その後、長岡藩から有名な人をどんどん輩出した。

「米百俵」と一緒だなということを感じた。学校のため、子どものためであれば、みんながある程度我慢しないとけないということが共通している。お互い我慢するところは我慢しながら、子ども達のためにやろうじゃないかという話。

学校関係者も「今でさえ忙しいのに…」というのが率直なところだと思う。保護者の方も「あら」という感じだろう。教育委員会も何もせずにそのままにしておけば楽だろう。何もしないのがいちばん楽。そこをあえて教委事務局は、時代の必然を感じ取って小中一貫教育、義務教育学校を提案し、説明会等を積み上げてきた。その上に立ってこの会がある。今回は、説明会で出たような不安やデメリットが中心に出て、共通理解を図る意味でお互いによかったのではないかと思う。

今日は、レジュメにもあるように、「小中一貫教育の必要性」、「江府町の学校教育の方向性について」を議題とする。校歌、制服、通学、学年の区切り等もいろいろ出てくると思うが、それは、方向性を出した上で具体的に話し合いたい。今日は2点についてじっくりと話し合いたい。

もう一度共通理解を図るために、義務教育学校について4点のメリットを話しておきたい。

1つは、子どもの学力が向上する。これは大きなメリットではないかと思う。丁寧な指導、系統性・連動性を意識した教育がなされる。理科で言えば、理科嫌いになる単元はだいたい決まっている。小学校では電気。目に見えないものは概念として分かりにくいので、つまずきやすい点をクリアして中学校を迎えて高度な内容を理解する。子どもは分かるようになると嫌いだったものが好きになる。点が取れるようになるとますます好きになる。そういった丁寧な指導が小学校から中学校へつながる。

2点目が、中1の壁、小中のギャップが緩和される。「ここまでは力をつけておいてほしい」という中学校、「力をつけたのに何をしているのか」という小学校、ということもあり得る。今までリーダーだった者が一番下になる等のギャップが緩和される。

3点目は、異学年交流による精神的な発達があるようだ。上級生は、困っている子に声をかけるような思いやりの心が育つと言われている。そして、規範意識。見本を見せなければという気持ちが働く。小さい子どもには、「中学生かっこいいな」といったような先輩へのあこがれが出てくると言われている。

4点目は、継続的な生徒に対する指導。いろいろな個性に応じた細やかで丁寧な生徒指導が小学校からの9年間継続できて、後輩にあこがれられるような子どもに育ててくれたらと思う。

私なりのまとめだが、他にも出していたきながら話をしていただきたいと思う。

今日はさしあたって、学力がなぜ向上するのか、報告書、雑誌にも出ており、実践した鹿野学園からも話を聞いた。その辺りはどうなのかということも、みなさんのご意見を聞きながら、進めていければと思う。

2 協 議 <進行：副委員長>

副委員長 委員長の熱い思いをお聞きし、4つのメリットがあるという話だった。前回は不安な面やデメリットといった懸念の部分も出てきた。「小中一貫教育は本当に必要なのか」ということははっきりとこの場で話ができている中で、「義務教育学校を進めていく」というところまでなかなか行かないのではないかという話もあった。今日は、協議の内容として、「小中一貫教育の必要性」について考えていきたい。その上で、「進めていくのか、そうではないのか」といったことについて話ができれば、今後の「江府町の学校教育の方向性」についても見えてくるのではないかと思う。この2つの柱に沿って進めていきたい。まずは、資料について事務局から説明を。

事務局 前回の会の中で、「小中一貫教育の必要性」についての再確認という話があった。前回の資料、説明会等でも「小中一貫教育が必要とされる背景」について説明をしてきたが、あらためて詳しく説明させていただく。

国でも小中一貫教育を推進しているが、その背景として挙げられるのは3点。

1つは子ども達の発達の早期化があり、これまでであれば中学生で伸びていたのが、小学校高学年あたりで大きく伸びていく。6・3制が導入された昭和20年代と比較すると、そういった伸びが2年程度早まっており、思春期を迎える時期も2年程度早まって、子ども達の心の揺れ動く時期が小学校高学年ぐらいから大きく変わってくると言われている。

また、自己肯定感、自尊感情についてのアンケートに対して、ちょうど小学校高学年ぐらいから否定的な回答が増えてくる。先ほどの子ども達の心の変化と大きく関わっていると思う。

同時に学習面について、学習が楽しければ学校が楽しくなると思うが、そういった学習の好き嫌いや学校の活動について、4年生から5年生に上がるあたりで肯定的な回答をする児童の割合が下がるという全国的な傾向も見られる。

そうした発達、心の変化の段階が2年程度早まっていると言われ、そうした子ども達に対して、これまで中学校で行われてきたような生徒指導の手法が効果的であったりすることもあろうかと思う。

同時に、小学校から中学校へ上がる段階での中1ギャップ、中1に上がった段階での授業の理解度、学校の楽しさ、教科等の好き嫌いについて、肯定的な回答をする生徒の割合が大きく下がる。これについては、江府小・中でギャップのないように取り組んでいただいているが、全国的には大きな課題として手当てが必要とされている。中学校に上がる段階での不登校傾向、不登校の増加といったことが大きくクローズアップされている。

なぜ、そうしたギャップが生まれるのかというと、小学校、中学校それぞれの学校文化の大きな違いがある。

小学校では、ほぼすべての教科を担当が受け持ち、一人一人をすべての面で見ながら子ども達と関わって指導を行っていく。中学校についてはそれぞれの教科ごとに先生がいて、それぞれの先生との関わりの中で学んでいく。そこに大きな変化がある。

指導方法についても、小学校でよく言われるのは「丁寧な指導をする」と言われる。中学校は受験に焦点を絞った指導を行っていくということで、そういった指導の変化もあろうかと思う。

家庭学習、評価方法の違いということで、家庭学習は毎日課題は出ると思うが、特に中学校では定期テスト等があり、それに向けた学習内容・範囲等が小学校とは大きく形が変わってきて、そういったことから生じる学習の苦手が表れてくる。

いちばん大きく違うのが部活動の有無。小学校は高学年であれば、水泳・陸上・音楽会などもあるが、中学校は部活動が入ってくることにより、大きく生活リズムが変わってく

る。それにプラスして、学習時間もしっかり取る必要があり、そういった大きな変化に対応できなくなっているという姿も見られる。

背景の3つ目として、家庭・地域での、社会とつながる、人とつながる体験させたり、そういったことを学ばせたり身につけさせたりする機能が低下しているのではないかとということが挙げられる。

その一点が大人と子どものコミュニケーションの減少。地域の中で大人と子どもが出会ったり関わり合う場面が減ってきたり、集落の中でみんなで集まって何かをするという機会もなくなってきたり、都会の方だけかもしれないが「隣は何をする人ぞ」といったように近所でもつきあいができないといったようなことも増えている。

子どもの数の減少も挙げられている。子ども同士が集まって遊んだり何かをしたり、そういったことが地域の中でも同級生がいない、遊べる友達がいないということできなくなっている。そういった環境が増えてきている。

遊びの中でも、テレビをみたりゲームをしたりインターネットをしたり、一緒にすることもできるが、一人でもできることが増えてきて、子ども達の人と関わる時間が減ってきているのではないかと。

また、不審者、交通事故等、外に一人で行かせることの心配もあり、なかなか外で自由に遊べないということもある。

そういった集団で遊ぶ機会、異年齢の子ども達と関わって大きい子から学んだり小さい子の面倒を見たりする機会が減っている部分、そこが集団生活である学校に大きく期待されている。異学年交流等の取組の活性化、全校でより多くの教員が全児童・生徒に関わる体制づくり、学校と地域が関わり学校も地域も元気になっていくといったようなことが学校に求められている。地域の方が関わってくださることで、子ども達も大人と関わる機会が増えていく。そういった集団規模の確保が学校に求められている。

社会の急激な変化に対して、より多くの人間関係の中で、より多くの大人達の見守りの中で子ども達が育っていく、そうした関わりの中で子ども達が学んでいくということ、この小中一貫教育を通して実現できるのではないかと考えている。

副委員長 全国的な小中一貫教育の必要性についてだと思うが、江府町として今取り組んで行かなければならないという必然はどうか。

事務局 一つは、自己肯定感。小中でも取組を進めていただいて、ここ数年で高まりつつあるが、多様な目で見ても子ども達をほめたり、新たな視点で子ども達を認めて子ども達が自分の居場所を見つけたりすることによってさらに高めていくことができる。少ない人間関係、固まった人間関係だけではなく、より多くの、いろいろな人のいろいろな価値観で子ども達を認めていくことが期待できる。

もう一つは学力面。学力は子ども達が将来自立していく上で必要な部分。小中でもそれぞれ校内研究を中心として子ども達にどのように学力をつけていくのかということに取り組んでもらっている。さらに、小中がつながり、先生方がつながり、目の前の子ども達を知ることで、学習の方法、子ども達の理解度に合わせた手立て等、小中が1本の筋で研究を進めていくことで、子ども達の学力をさらに伸ばしていくことができるのではないかと考える。

先生方がつながるといことが、子ども達にとって非常に大きな効果があると思う。

副委員長 小中一貫はいいものだという事は分かるが、このままでいった場合と、小中一貫を進めていった場合とどのように違ってくるのか、具体的なよさは。具体的なところで小中一貫を進めていった方がいいなと思えるような根拠となるものをお示しいただけると、必然性ということについて「それなら小中一貫を」とか「今のままでよいのではないかと」といった議論ができる。一般的にどこでも通用することではなく、江府町だから…ということころについて。

事務局 私見になるかもしれない。

江府町は保育園からずっと同じメンバーで上がっていく。その中で人間関係が作られていくわけだが、いい関係ばかりではなく、困ったり悩んだりすることもある。そうしたと

き、多様な学年で関わりあえる仕組みができていくと、変な言い方になるが、子ども達に逃げ場、自分の居場所ができる。そういうよさを作っていないといけない。小学校6年間、中学校3年間でも作ってもらっていて、小学校は休憩時間に校庭で異学年で遊んだり、中学校では部活動の中で先輩・後輩の関わりを持ったりしている。それを9年間という大きなくくりの中で、上の学年が思いやりを持って小さい子と関わる中で、それぞれが居場所を見つけることもできると思う。

中学校が30人台の時代を迎える。今やっている学校行事は無理なので、小さい規模に変えていくことも一つの手だとは思いますが、行事の活性化、上学年が大人数の中でのリーダーシップを身につけていくこと、より大きな先輩の姿を見てあこがれること、より高いレベルを目にして自分たちの将来の姿をイメージすることによって、切磋琢磨・努力をしていくことにつながるのではないかと。

陸上・水泳等のリレーが強い学校があると、子ども達もそれが当たり前となって努力をし強くなるということも経験上見てきた。もちろんそこには、先生方の指導もあるが、そういったより高いレベルの見ることは子ども達を高める上での効果もあると思う。9年間の長いスパンというのは効果的ではないかと思う。

委員 現在、小中とも努力をしておられる。

中学校では、アントレプレナーシップ教育で、地域に目を向けて話し合い、実現され、成実感を持って郷土愛を育てておられる。発表のために上手に発表するための力がついていく。仲間の意見をまとめることができるか、メリットを挙げれば数限りない、全国でも珍しい取り組みをしておられる。

小学校では、郷土学習を一生懸命しておられる。遠足で江尾の町から明倫小まで、1年生も一生懸命6年生について歩いて、6年生の指導の下に並んだり説明を聞いたりしている。5・6年生の指導がきちんとできていて、下級生も先輩たちすごいなと思っている。郷土に根差した教育をしておられる。

小中ともに落ち着いて生活している。

それでもよいが、さらに力をつけてやりたい。さらにリーダーシップを身につけさせてやりたい。さらに先輩としての思いやりを醸成させたい。

さらに良くしようと思えば、さらに一歩踏み出さないといけないのではないかと。

小中共にチームワークよく頑張っておられる。

学力をつけるのには、子どもがやる気にならなければならない。子どもが「あ、これおもしろい。勉強してみよう。」と思えば、これほど素晴らしい教育はない。そこに気がつくと、すごい力を発揮する。それにはやはり、それぞれの教科の専門の職員が必要。無免許の者が教えるのと、大学で勉強してきた者が教えるのとではやはり違う。専門の免許を持った人が教える必要がある。ところが数年たてば、中学校の教員が減る。昭和30年代に返ってしまうような状況。

小学校の先生が一緒になれば、「これならやれる」というふうに広がるので、行ったり来たりはたいへんだが、後で考えることにして、専門の職員が指導するようにしないと、力はつかない。教科担任制にすれば、「おもしろい」と思える可能性が大きい。

副委員長 今、委員長からメリットの話があったが、小中一貫を進めなかった場合のデメリットの話として、教員の数が減るといったような具体的な数字なり根拠は。

事務局 前回参考資料としてお配りした資料の中に、PTAからの質問・意見書に対する回答の資料がある。

小学校が特別支援学級を入れて7クラス、中学校は特別支援学級を入れて6クラス、学年は小中共に1学級ずつしかありません。中学校が令和3年に3学級になる。支援学級がなくなるので。そうすると、学級数に応じて決まる教員の配置が、校長・教頭を含めて8名になる。校長は授業はしない。教頭は授業をする。それ以外が6名。教頭1名は、何の教科が来るかは分からない。昨年度は事務の教頭だったので、補助としては出られるが、授業は持たない。

定数8のうちの6として話をさせていただくと、6名で9教科を回していかないといけない。入試科目の5教科を6名のうちの5名で見て、残りの実技教科のうちの1つを1名

が見る。残りの3教科は、非常勤が入るかもしれないが、分からない。場合によっては、免許のない先生が指導をしていくということになる。それが子ども達にとってどうかという話を以前させていただいた。小学校でその教科の免許を持っておられる先生がいれば、中学校でも指導ができる。子ども達にも有益であろう。

加配の先生が非常勤で来た場合、6名の先生は免許外の教科を担当しなくてもよいので、音楽であれば週に4.3時間。国語でも10時間前後。その先生が小学校に行ってT2で教えることもでき、場合によっては小学校で教科担任制の授業もできる。

副委員長 今後、定数の減少はある。義務教育学校にすることによって、カバーができていくのではないかとことや、中学校の先生の余裕ができた分、小学校にも回っていきけるのではないかとというようなメリットの話もあった。

ここでみなさんに協議していただきたいが、まず質問等をいただいて考えていきたい。

委員 今、教科指導で先生を回していけること、生徒指導面、精神面で子ども達を支えていくこと等、小中一貫のソフト面のメリットはたくさん出てきた。

一緒にやるということを考えて、どうしても「一つの施設でそれができていく」というイメージだが、江府町の場合、校舎を別々でするとなると、具体的に考えていかないといけないことがたくさん出てくると思う。

義務教育学校で効率を上げている学校は全国的に見ても「施設一体型」。「分離型」ではどうなのか。ハード面でどうなのかというところが、ちょっとひっかかっている。

委員 定数の話が出たが、今であれば、数学の免許を持っている先生が家庭科の免許も持っておられてうまくやっておられる。ただ、それがぴったりくるかという問題はあ。技術、美術は非常勤になっている状況もある。その辺りがうまく回るかという懸念もある。

ただ、例えば、音楽の先生を小学校から行かせようとした場合、現状であれば、1年の担任が6年の音楽も見ている。4年の音楽も持っている。さらに中学校も…というのは、数字上はできるかもしれないが、前後の移動を考えると物理的に無理な部分もあると思う。今、中学校から英語の先生に来てもらうだけでも、その前後を空けてもらっている。移動があるということはそれなりのデメリットが出てくる。そこを確保しないと、物理的に無理。

教材研究もプラスでしないといけない。小学校のことはだいたい分かるとしても、中学校の音楽となる本当に教材研究をしないと。それなりのレベルの授業をしないといけないので、簡単なことではないのではないかなと思う。

うまく回るやり方を考えていかないと、子ども達にもプラスにならない。小学校の教員にも中学校の教員にもプラスになるというやり方を考えていかなければならない。

1つ例を挙げると、中学校から理科の先生に来ていただけるとした場合、理科デーを設けて、その日一日は3～6年の理科を見ていただくとする。専門の先生の工夫をした授業だと、子ども達も楽しいと思う。そういうふうにして、お互いの行き来をうまくやるために、できるかどうかをシミュレーションして、これだったら効果が上がるということであれば、子どもにとってはプラスになるので、学校としても頑張ってもやりたい。その辺りを細かくシミュレーションすることが大事かなと思う。

副委員長 施設が離れていることのデメリット、今の状態では難しいが、工夫すれば可能かもしれないということを書いていただいた。

事務局 教員のことについては、一つの学校になったらそもそも担任を誰にしようかということからスタートする訳で、今の担任配置の中で「行かせやすい」「行かせにくい」という話はない。

県教委は、「義務教育学校になれば両方の免許を持った者を配置するよう努力する」と言っている。現在はまだ制度が変わらないので、当分の間は両方の免許を持つ必要はないが、いつ、どの段階で両方の免許が必要になるか分からないので、両方の免許をもつ者がよいというような話はちょっと出ている。

- 副委員長 今のものを元に「難しい」ということではなく、新しく組替えるということをお大前提の上で、この会では話し合うべきではないかと思う。
- 事務局 視察に行った先で話を聞く中で、一体型の義務教育学校においても「あえて段差を設けて、各段階でのリーダーシップを体験させている。自分達の成長が見えるようにしている。」と言っておられた。
江府小・中には、どうしてもない物理的な距離という段差があるので、成長の一過程として子ども達がそれを乗り越えていくような取組をすることで、メリットとして活かしていくことが必要。
ただ、移動の問題は出てくる。今、小学校と中学校がそれぞれに生活時程を組んでいるので、うまく合うような時程は組めていないが、一貫教育を前提とするのであれば、生活時程そのものから見直していく。小学校45分、中学校50分というルールはあるので、そこから検討していかなければならない。
- 副委員長 進むということになれば、そういったことを今後、この会で話し合っていくことになる。
- 委員 一歩前提の話をもう一度となり申し訳ないが、教育長から「小中一貫教育をしなければいけないんだ」というお話をもう一度お聞かせいただきたい。
それを踏まえた上で、自分達は保護者代表として来ているので、その言葉を受けて、その言葉を持って保護者のみなさんに説明できれば、小中一貫教育を進めるべきだということで私も納得できるし、みなさんにも説明できると思う。
今の説明を聞いて、小中一貫教育を進めなければならないということが、自分の中でうまく説明できないので、それができる資料を今回期待していた。
少なくとも教育長から説明していただければ、私の中では落ちるかなと思う。
- 委員 自分も同じ気持ちで、保護者アンケートの資料を持ってこさせてもらったが、分からないという声が多数なので、方向性をしっかりと示してもらって、自分達もしっかり保護者さんに返せる答えが聞きたいし、必要になってくるのではないかと思う。
- 教育長 これまでと違うことはないが、いちばんは2・3年後に中学校の子ども達が極めて少ない人数になるということ。これが、そもそも一貫教育を進めていかなければならないと思ったきっかけ。34人というのは、場合によっては複式学級にでもなるような、そういった人数。全校生徒がそのくらいの数の中で、望ましい教育環境を提供していけるかと考えたとき、なかなかそれは難しいというふう考えた。
いろいろな弊害も出てくると、勉強をしていく中で感じた。実際に自分も校長をしている中で、例えば、部活動が成立しにくくなるとか。
自分は、小規模校のデメリットを補うのは、部活動がその一つだと考えていた。小さな学校でできないことが部活動を通して学習できる。例えば、吹奏楽部が西部地区で150名ぐらいの選抜バンドを作っているが、過去にその代表になり、150名を引っ張っていったり、1000人ぐらいの前で挨拶をしたりした時代もあった。野球も県大会で優秀な成績を収めていた時もあった。テニスも、中国大会・全国大会に行っていた時もあった。卓球も頑張って県大会に行っていた。
小さな学校のデメリットの中に、大人数の中でもまれるとか、たくさんの中で自分の思いをしゃべるとか力を発揮するとかそういった経験ができない中で、部活動を通して子ども達は経験をし自信をつけていたと思っていたので、部活動は小規模校のデメリットを取り除くものだと思っていたし、そういった取組もしてきた。
それが、それすらなかなか難しいような数になってきている。
この人数で、どのようにしたら教育環境が充実していきだろうかと考えたとき、やはりある程度の集団規模を確保することが大事だろうと考え始めた。それが、いわゆる義務教育学校。今は、小学校内、中学校内での異学年交流はできているが、校種を超えた交流はそこまでできていない。そういった交流をすることで集団規模を確保したり、行事をしたりすることで、子ども達がより恵まれた環境の中で学習に取り組めるということをお思った。
一方で、小中一貫教育がとても大事だということも叫ばれている。義務教育学校の大き

な目的の中に、小中一貫教育の充実ということもあろうかと思っている。

先ほど小中一貫教育が求められる背景について話をしたが、これは都会やどこか遠いところの話ではなく、本町でも随分あてはまる場所があると思っている。

アンケートを取ったわけではないが、子ども達と関わる中で、あるいは指導主事と話をすることで、ちょうど小学校5・6年生のところで急に授業が難しくなるとか、ここでつまづくといった話をしたり、教師の経験の中でそういったことは感じている。実際に、自己肯定感についてはそんなに高くないという調査結果も出ているし、西伯郡のアンケートでも4・5年生の自尊感情が低くなっている。全国の調査と全く同じ傾向が出ている。我々が肌で感じていることと同じだと思っている。西伯郡はそういった中で交流を盛んに進めようとしておられ、年度比較をしながら少しずつ高まっていっているという話も聞いている。

中1ギャップという話も出た。今は、他の校区に比べて不登校のお子さんはそれほど多くはないが、実際にいる。

今でも、小学校から中学校へ上がるときに、こういう配慮をお願いしますとか、場合によっては春休みに校舎見学をすとか、そういったことは行っている。入る前も入ってからも行っているが、そこが限界というか、それが一つの学校になれば、いつも職員会でその子の話題が出る。こういうことで悩んでいる、つまづいているという話が出る。先生方みんなの共通の課題になる。今は申し送りだけ。そうではなくて、常日頃から一人一人の子ども達のことを全教員で見えていく、関わっていくという体制を取るには、一つの学校としてやっていく方が効果があるだろうと思っている。

そういったことを考えていったときに、小中一貫教育を充実させるためにはどうしたらいいか、ある程度の集団規模を確保するためにはどうしたらいいかということ考えたときに、義務教育学校がよいのではないかという話し合いを事務局でした。

ただ、話にあるようにメリット・デメリットがあり、校舎が離れていることは大きなデメリットだという話もいろいろなところで聞く。それで二の足を踏んでいる学校もある。

私達の捉えは、デメリットをメリットに読み換えることもできるのではないかということ。5・6年生の段階で段差があるのであれば、5・4制にして段差をなくすとか、校舎を変わることで一つの区切りになるとか、そういうふうにしてデメリットをメリットと見ることできると思い、義務教育学校が本町にはよいと思った。

また、「小中一貫教育が必要」となった時、今の小・中学校であろうが、一貫校であろうが、義務教育学校であろうが、校舎はいずれにしても分かれている。その中で小中一貫教育を今よりももっと充実させていこうと思ったら、一つの学校にしたら、先生方みんなが1人の子どもに対して積極的に関わっていったり、みんなで共通理解をして取り組んでいくことがしやすくなったり、中学校籍の教員が小学校校舎に行き授業をすれば、小学校の先生方に教材研究をしてもらえ、あるいは理解が進まない子ども達がいたら先生2人で教えることもできる、空いた時間を活かしてもっといい教育ができると考え、義務教育学校を提案させていただいたところ。

副委員長 教育長からの話があったが、それを受けて何か意見があれば。

委員 私の中での認識としては、小中一貫教育を進めるべきだというのはなんとなくは分かる。みなさんのお話を聞いて思ったのは、小学校の時は、社会性とか精神的な面を養ったりするためにも教科ごとではなく幅広く全体を見た方がいいし、どこかで専門的な教科の勉強もしなければいけない、それが多分中学校だろうから、そうなる時に、小中一貫教育だと柔軟な対応ができて、子どもにとっていいということがまず大前提にあって、かつ江府町で言うと、生徒数が減っていく中で規模を維持するということが、学年1クラスを維持できるし、部活動の存続もできるということで、小中一貫教育を進めていく必要が、江府町にあるのではないかと理解した。

事務局 部活動は、例えば小学生が入っても大会等には参加できない。

部活動については、義務教育学校が決まってから改めて話し合ってもらえばよいが、例えば、6年生が一緒にすることでにぎやかになり活気が出て充実した練習ができるとか、そういうことはある。

考えようによっては、テニスでも野球でも5・6年生からやっていたら、先輩の姿を見てもうまくなる。それが、中学生になって大会に出たときに、成果として力がついて、大会で勝って、勝つことがすべてではないが、その子の自信につながっていい循環になると思う。

副委員長 先ほど小中一貫教育については上手くまとめていただいたが、よいか。

委員 前回から考えていたが、小中一貫教育を仮に推進した場合、保護者がいちばん不安になっているのが、9年目でどういった人間形成をするのかということだと思う。

郷土学習とかアントレプレナーシップも大事だが、着地点として9年後に江府町としてはこういった人間形成をしていく、だから小中一貫教育としてこういったカリキュラムを取っていくということが保護者に見えるようにしていかないと、腑に落ちないのかなと思う。小中一貫教育の各年代のカリキュラムはもう整備されているか。例えば1年次、2年次、3年次…そういうのはまだではないか。それができていないと、どういうことを学ぶのか不安になるのだと思う。

進めていくにあたっては、9年間の教育計画を整備する必要があるのではないか。それがしっかりしていれば納得がしやすくなるのではないか。今、その土台がないと、すぐには進められないのかなと思う。

副委員長 現段階で、小中一貫のカリキュラムはあるか。

事務局 一貫はない。学校ごと。それをつないでいって、系統性のあるカリキュラムを作ることになると思う。

先ほどからあるように、自己肯定感が低いまま社会に出ていくというよりは、ここで自信をつけて出ていくように、小中それぞれで取組はしているが、さらに小中一貫による効果によってより高まっていくこと、そして、町としては自分達のアイデンティティの元となるふるさとに愛着を持って、ふるさとを土台として成長して羽ばたいて行ってほしいという思いもあるので、そうしたことが一貫カリキュラムの中に組み込まれていくものと考えている。

委員 義務教育学校という方向性が決まった後に、小・中学校、教育委員会がカリキュラムを組み上げていって皆さんに提示ができるものだと思う。

委員 案のようなものがあれば。

委員 いずれにしても、今よりもよくしていくために議論は尽くすべきだし、作っていくべきだと思う。

副委員長 他にはどうか。

委員 これは、この先何年間を見据えて行っている。全校で30人台になるタイミングがあることは結構前から分かっていたと思う。教育長が言われていたが、分離している状態は、どちらかと言えば作ったもの。中学校の校舎をそこに建てたんだから。その段階で何とかできなかったのかというのは、前回も話した。今さらどうしようとは思わないが。

その校舎が建てて5・6年。5・6年先の未来展望も描けないのに、今この話をして、この先もっと数が減ったとき、その時その時にまたこの話をして、やり方を変えていくのか、この先ずっといってこの人数でも対応できるような計画が立たなかったら、結局その場しのぎ。ずっとその場しのぎになるのではないかなと思う。その辺りはどうなのか。

必要性があるのであればもちろん議論をするのはあるが、その場のデータだけをみて「こうしよう、ああしよう」というのも、個人的には違うのかなと思う。もうちょっとその辺りのデータは欲しい。

委員 以前にもこういう会があって、保育園も小・中学校も一緒なところに建てようという話

もあったが、いろいろと事情もあったりして、こういう形になった。やむを得ない部分もある。後手後手という表現もあり、そういうふうを受け取られる面もあるかもしれないが、事務局としては先取りの気持ちでやっておられ、義務教育学校もこの2・3年で増えている状況。郡内でも話し合いは始まっている。いずれはやらなければならないことであれば、早めにやった方がよい。最初に話したように、何もしないのがいちばん楽。

「教育委員会としては、やる」と受け止めた。

教 育 長 「もう少し見通しを持ってできなかったのか」とおっしゃるのはもったいなこと。江府町の教育の責任者として、たいへんな状況を迎えるというのが分かっているけども何もしないというのは、無責任だと思っている。過去のことは反省をしながら、より子ども達によい環境を提供したいということで話をさせていただいているとご理解いただけたらと思う。

副委員長 計画性ということもあるかと思うが、どの形が江府町にとって必要なのか先を見据えて議論していくということは間違いなくやっていかなければならないこと。何年か後でも「あの判断はよかった」と言えるように、こうして今、議論している。

前回と今回の2回で、義務教育学校を進めていくのかどうかはまだ決まっていない。教育委員会からは強い意志で「やろう」ということも言われている。メリットもデメリットも踏まえた上で、どうするかという意思を決めておいた方がよいのではないかと思う。どんなふうにしていくのかはこれからだと思う。いろいろところでひっかかっておられる部分は、また話し合っただけで決めていくことだと思う。

委 員 私見を言わせてもらおうと、人がいないというのは本当に大変なこと。今、人が足りなくて余裕がない。余裕がなくなると教育の質が落ちる。実際に何年か後に中学校の教員が減るのは、危機だと私は思う。子ども達のためには、人が必要だと思う。

副委員長 義務教育学校に向かっていくかどうかということは、皆さんからご意見をいただければつきりさせたらと思う。

委 員 具体的な資料が少ないのかなと思うが、どうか。どういう形がよいかは、しっかり議論した方がよいと思う。

委 員 義務教育学校以外はあるか。

事 務 局 小中一貫校がある。

委 員 今の段階で判断するとなると、小中一貫教育を進めるべきだと思う。義務教育学校なのか、それ以外の手法があるのかということがまだ分からない。この場で、「義務教育学校に賛成か」というと、ちょっとその手前で立ち止まって、義務教育学校以外で何かいい方法があるのかないのかを教えていただきたい。

委 員 小・中のシミュレーションは大事だが、方向性が決まってから組み立てていく内容で、それからでもよいのではないか。

委 員 昨年、保護者にアンケートを取って、議論していただきたい内容を申し上げた。一つは「小中一貫でやるのかやらないのか、そこから検討していただきたい」ということ。もう一つは、現場の教職員が「本当に必要だ」というふうに感じられてやられているかどうか。その辺りをしっかり確認を取っていただきたいということ。

というのは、保護者の我々は現場の教育がどうなっているのかというのが分からない。教育委員会が、いろいろ調べて、今こういうのが必要ではないかと研究された。その中に、実際に江府町の教育に携わっておられる教員の方の意見をしっかり組み込んで、現状に合ったところから議論して行ってほしいということがあったと思う。

その内容を、私としては見て判断したかった。自分としてはまだ情報が欲しい。現場の

教職員の意見を把握したい。その辺りの意見集約がされていないというのが昨年度の保小中の保護者の打合せの中ででてきた話だったので、現場の温度間というのも保護者に説明する際には必要だと思うし、一貫教育あるいは義務教育学校に進む動機づけとしても教えていただきたいと思っていた。今日の資料にそれがあると思っていたので、個人的には「どんどん行きましょう」という気持ちにはなれない。

副委員長 教職員の意見としてどんな意見があるかということも踏まえた上で判断したいということでしょうか。

委員 そうだ。そのままいっちゃうのか、一新されるのか全然分からないが、ただ、間違いなく学校を作られるのは先生だと思うので、現場の意見が必要だと思うし、他の保護者からも出てきたので、その辺りも踏まえて、「じゃあ、やはり進めるべきだ」と思いたい。

委員 おっしゃる意味はよく分かるが、今はどこの小・中学校も忙しい。聞けば「いや」というだろう。そのことはご承知いただきたい。

委員 もし、進むということになるのであれば、現場の先生にも「よし、やろう」と思っていたきたい。そこが、保護者として不安な部分。「教育委員会から言われて…」と思ってほしくない。そんな温度間があるということが保護者も不安だと思うし、そういう気持ちは出るとは思うが、職員にも進んでもらえるように話ができてますとか、説明をしっかりとやりたいですとか、そういうようなところ。

事務局 前回そういう話もあったので、先生方には聞いているが、ペーパーに落とすのが間に合わなかった。今お話もあったので、時間も来ており口頭で申し訳ないが、お伝えしたい。

6/14・20に中学校、小学校で話を聞いた。肯定的な意見もあり、不安や課題もある。その中でいくつか挙げさせていただく。

・江府中学校（6/14）・江府小学校（6/20）

●義務教育学校、小中一貫校は今後増えていくと思う。そういう先のビジョンを見据えてやっていこうという考え方自体は悪くはない。

●デメリットばかりではない。中学校も持ち時間が少ないので、うまくやればいいかもしれない。

■なってしまったらなってしまったで何とかなるだろう。

■メリットとしていいものが生まれるということが分かっていたらいいと思う。

▲近隣の小・中は校舎が近く、PTAも同じ組織なので、参観日もPTA総会も同じ日にする。そういうことが可能ならばいいが、物理的な距離がある。心情面で離れてしまってもおもしろくない。

▲小学校文化と中学校文化とのギャップというのがあるのは事実で、その理解は、努力していかなければうまくいかない。数年はかかるだろう。

▲5・4制と言われても、「そこにエネルギーを使うメリットはあるのか」と思ってしまうのが正直なところ。

▲小学校は2年度から、中学校は3年度から指導要領改訂で、教科書も全部変わる。たいへんな時期に準備をするとすると、「できるのかな」という意見はある。

▲何かを変えるとすると、子ども達にも働く我々にも負担がかかって、そのひずみは何かに表れてくると思う。

○義務教育学校にすることによって「こういうことがよくなっていく」ということがみんなにあれば義務教育学校がいいのだろうし、そうでなければ負担感の方が強くなっていくだろう。

○先進地の成果はあるが、江府の子達の課題や伸ばしたいことと義務教育学校がどうつながるのかなというところが、まだピンとこない。今のままだったらどうなのか、どこが課題なのか、そこを伸ばすのにどういう形がいいのか。

○組織も含めて、どういうのがいちばんいいのかを、今後は具体的に検討していくこと

になる。

<心配・不安・課題について>

▲6年生が中学校校舎に言った場合、6年生にとってメリットがあるのか。まだ遊びたい盛りの6年生のことを考えてあげたい。

○保護者さんの声として、いずれにしても学年の人数は変わらない。できれば学年の人数が増えたらいいなという話が出ていた。

▲校長・教頭は、小学校、中学校だけの出張もたくさんあり、相談とか報告とかしたい時にいないことも多々ある。家庭への連絡・対応が後手に回って即時対応に弱点がある気がする。

▲準備段階の時間、打合せ・調整の時間が膨大に必要。それを日々の授業をしながら行っていくとなると、教員の負担は今よりもはるかに増えていく。

▲ただ、単純に免許のことだけではなく、教える力があるか。

具体的な説明はまだ十分にはできていない。14日、20日も忙しい中で、短時間で聞ける部分だけを聞いた。今後何かあれば、管理職を通して伝えていただくようにしている。

副委員長 現状、小と中は、交流等できることはやっているという把握でよいか。

委員 考えているのは、中学校の総練習に5・6年を連れて行って見せるとか、5年生の教材で琴があるので5年生を連れて行って交流するのはどうかと考えている。

委員 中学校区でできる限りやっぺいこうという校区は県内にもある。小中一貫校についてはあまり触れられていない。

小中一貫校となった場合はどうなるか、説明していただきたい。

事務局 小中一貫校だと、一貫しているのは子ども達をどう育てていくかという教育目標。小学校、中学校があっても、小学校の先生方も中学校の卒業時の姿をイメージし、そこに向かって指導を行っていく。

ただし、一貫校はあくまでも一つの学校なので、それぞれに管理職。先ほどの相談のように、校長先生方が「何とか子ども達のために」というふうにしてくださいればよいが、そうじゃないところもあるという話を聞いているので、そこがうまくいかいかないかでグラグラするような形ではなく、義務教育学校で1本柱がよいのではないかと考えたところ。

副委員長 小中一貫校は今の形で、より小中の関係が強くなり、9年間を見据えたカリキュラムで教育が行われていくという理解、義務教育学校は、校長・教頭1人ずつ、職員も1つの集団で行っていく、そこが大きな違いだという理解でよいか。

事務局 はい。

副委員長 結論を出すというところまではいけませんが、いずれにしても小中一貫は大なり小なり進めていかなければならないということは確認させていただいた。今後、小中一貫校か、義務教育学校かということについて話し合いをしなければならないかと思うが、いかがか。

委員 デメリットがどうしても先行してしまうが、江府町のいいところは、保育園も含めて、小さな集団の中で、こうしましょうと話し合えば、保護者も先生も地域もその方向に気持ち向いていけるというのがメリット。0歳から15歳までの江府町の子ども達をどう育てていくか、どういう子ども像を描きたいかということを見据えた上での9年間の話をしていきたい。

福部未来学園は、幼も含めた小中の義務教育学校がとてもいいと聞いた。幼のところも含めた義務教育学校をこれから考えていけたらと思う。

副委員長 時間が来たが、今日はどの形でということは決まらないということによいか。それにつ

いては次回持たせていただくということでよいか。

委員 個人的な思いでいうと、小中一貫教育というのは賛成かと言われると、広島県の離島に最先端の教育をしている中高一貫の学校ができて、そこはプログラミング教育とか英語教育とか世界から生徒が集まってきている。一貫教育というのは、生徒を伸ばすためにはいいことだと思う。

ただ、最初にも行ったが、計画や目標設定がしっかりしていないと、どういった人間性を作っていきたいのかが見えてこない。保護者はそこが大事だと思う。

副委員長 今後この会で、どのようなものにしていくのかを議論して、形作っていくということでよいか。

委員 保護者に示していきながら、同じようにいいものになって納得していただければ、いいものになって思っただけだと思う。

副委員長 次回は、形をどうしていくのかということで、しかも保からの15年間を見据えた上で、どういう形にしていくのかの辺りを議論させていただくということでよいか。

委員 よい。

副委員長 次回の日程について、いかがか。

委員 7月22日からの週であれば。

委員 夏休み前にはっきりさせたい。保護者に進捗状況をお伝えしたい。

副委員長 形のことだが、どんな議論をしていくか。

事務局 小中一貫校と義務教育学校の違いや、アンケート調査等の資料はお示しできる。

委員 小中一貫に向けて、必要だということは認識されたと思うので、小中一貫校でやるのか義務教育学校でやるのか何年制でやるのかということについて次回議論するのだと思う。小中がまず連携をとるんだよということは理解した。

副委員長 あとは、みなさんがどのような形を未来像として考えるのかということ。1つずつ何かの根拠をお持ちいただいて、「何となく心配です」とかではないところで話し合いたいの、少し考える時間なりあった上で、前に進んでいけるといいなと思う。少し時間があつた方がよいのではないか。これから学校もものすごく忙しい時期。

委員 7月23日はどうか。

委員 保護者もすごく関心を持たれていると思うので、今こういう感じで進んでいますということは返していきたい。

副委員長 23日(火)でよいか。

委員 よい。

委員長 遅くまでありがとうございました。

熱心に協議していただいた。次回は、小中一貫校か義務教育学校か、具体的に話し合いができたと思う。

●第3回委員会：

- ①日時：令和元年7月23日（火） 午後7時30分～午後9時
- ②場所：江府町防災・情報センター 1階 自主防災室